

著者略歴

本名長越茂雄、1925年東京に生る。早稲田大学仏文科卒業。現在三笠書房勤務。

著書 「谷川岳研究」「谷川岳」「回想の谷川岳」「登山技術」「霧の山」

訳書 A. ヘックマイヤー「アルプスの三つの壁」、バルザック「純愛」、R. ランペール「山に闘う」、ギド・レイ「わが回想のアルプス」

著者との協定により
検印廃止

昭和三十三年六月二十日 初版発行
昭和三十三年七月十日 三版発行
山岳文学選集四

朝 焼 け

定価 二九〇円

著 者 安 川 茂 雄
やす かわ しげ ひと

発 行 者 新 島 章 男
にい じま とも ひと

東京都杉並区永福町一〇三

印刷所 株式会社堀内印刷所

東京都千代田区神田三崎町二ノ一六

発 行 所 株式会社朋 文

東京都千代田区神田猿樂

電話東京(29)

振替東京二五

朝焼け

安川茂雄



朝
焼
け

朝焼けよ、朝焼けよ

わが、はやき死を悼みて

ひかり耀く……

あるスイスの俗謡より

第一章

テアトル・ニッポンの前には五十人ほどの客が建物に身を寄せつけ、みんな申し合せたようにオーバーの襟に顔を埋め、背をかがめて寒々と佇んでいる。まだ開場には時間があるらしく人の列は建物にそって、神妙に竝んでいた。

真杉達也は、その列を見やうてから気ぜわしく腕時計を覗いた。丁度十時である。あと開場には二十分あるから三百人は竝ぶだろう……彼は煙草に火をつけると、人の列を横眼に眺めながらテアトル・ニッポンの向い側にあるOS劇場の二階の閑散としたフルーツパーラーのドアを押した。そして窓側のボックスに坐るとコーヒーを注文して、もう一度眼下の人の列を硝子ごしに眺めてみた。いくらかは無料切符の客もいるのであるが、やはり初日の朝の「うちこみ」の客は一人一人に丁寧にお辞儀して廻りたいくらいにありがたかった。例えどんなに宣伝費をかけて前宣伝をうとうとも、玄人筋の前評判がよかろうとも、実際に客が来てくれなければ詮方ないのだから、初日の「うちこみ」の朝の客の動向は、以後の興業の成否の鍵としても重要なわけである。ましてけさの「うちこみ」は、師走の二十二日——クリスマス・イヴを数日後にひかえ初春にか

けてのロードショウだけに真杉の気持を一層緊張させていた。それは単純な緊張とはちがって一種スリリングな緊迫感である。或る種のギャンブリングな興奮感ともいえる。

客はすこしずつ増えて、その列はテアトル・ニッポンの軒下から、さらに隣りの東都劇場の脇にまでのびていた。真杉は白磁の厚手なコーヒータ碗をゆっくり口にはこびながら、四百人は確実に越えると思った。この暮の二十二日、いくらタイアップのさまざまな景品つきとはいいながら、朝の十時頃から映画を見るなどよほどの閑人でなければ、この映画にそれほど興味があれば集まるわけではない……そう真杉は身勝手に推量して、もう一度テアトル・ニッポンの前につくねんと並んでいる人の列に視線を当てた。そして一人一人の風態を吟味しはじめた。このしゃれたフランス映画の魅力に惹かれてやってきたのか、それとも閑つぶしに見にきたのか。劇場の底には『薔薇色のランデブー』という映画の看板が派手に飾られ、半裸の美女がこちらを向いてウィンクしている。お世辞にも芸術映画といえる代物ではない。題名の下にはキャッチフレーズとして、《フランス映画のエッセンスをバラ色のカクテルにした新春第一の話題作》と書かれてある。訳の分ったようで分らないこの文句を考えるのに真杉は真剣に一週間以上も費したのである。彼は、一人一人の客の表情を視線にとらえながらそのとき妙に空虚な感情におそわれていた。

けさ、郊外の自宅を出るとき、東の空がいくらかうっすらと赫っぽく焼けているのが眼に入った。朝焼けである。真杉は、その爛れたような空の色彩が余り好きではなかった。たしかにこれ

までの体験からすると、「うちこみ」の朝に朝焼けを見た日はどうも入りが悪い。これは一種の彼の縁起^{げんぎ}みたいなものかも知れなかったけれども、やはりそれなりに気懸りだった。別段、朝焼けという気象現象は都会ではさほど意に介すべき事柄ではないかも知れなかった。併し山では朝焼けになると午後から天候が悪化するといわれていた。事実彼は朝焼けの日の午後、山は荒れていくつかの遭難に出会ったこともある。つまり不吉の前兆とされてきた。その山での凶兆を真杉はいぜん社会生活でも或る一種の執念をもって信捧していた。それが彼にとって数少なくない現実生活における山からの影響かも知れなかった。既に彼は興洋商事という外国映画配給会社に勤めて六年になり、いま宣伝部長の地位にあった。三十四才という年令としては破格な出世ではあったが、それだけに不断の緊張と神経的消耗をつねに強いられてきた。客は、真杉の予想より遙かに数をまして、その列はさらにのびていた。四百は確かに越しているだろう。真杉の空虚感^{くうこ}は、一種形容のしがたい倦怠感をともなつてひどく重たげだった。

たしかにけさの「うちこみ」は成功には違いなかった。『薔薇色のランデブー』に関する限り彼の商売は一応成功したといえる。それまで年に、五、六回、隔月ぐらゐに彼はこの賭けを繰りかえしてきたのだ。

日本の外国映画配給会社には大別、二種類あつて、ひとつはメイジャー系アメリカ資本の大映画製作会社の支社と、日本人経営の配給会社とで、真杉の興洋商事は、この種の会社としては二

流どころのもだった。戦前にあったいくつかの輸入会社の実績を集めて戦後誕生したのである。アメリカ資本の支社以外、日本の外映配給会社は、その社の実績に従って年に幾本という外国映画輸入の割当をもたされていて、その範囲でしか商売はできなかった。興洋商事は正式には五本のクォーターがあつて、主としてヨーロッパ諸国の映画を輸入していた。それら輸入映画も作品によつて価格が異なり、日本映画よりも安いものもあれば、ハリウッドなみのギャランティのものもあった、主として監督、主演スターなどによつてきまるのだが、戦後ヨーロッパ映画はフランスが殊に高く、見方によつては日本の輸入業者同士がせりあげたようなものだった。輸入した映画が儲かるか損するかは日本で上映した結果の興業成績いかに依る。買入れたギャラの価格と相対的な面で、いかにヨーロッパで好評の映画でも日本の風土や好みに合わない作品がいくつもある。この商売はつまり、買い方と売り方の二つのギャンブリングな操作が必要だった。そして多くの場合、売り方がこの商売の極め手となるようだ。買い方が下手でも、売り方さえよければ、この商売は結構割に合った。それと同じことは、どんな上手な買物をして、売り方がへまをやれば閑古鳥の鳴きそうなロードショー劇場を生むのである。パリやロンドンの場末の映画館でしか上映しなかった作品も売り方によつては、結構ロードショー劇場に客の列をつくりうるのだから、見方によつては金の卵を生むボロイ商売かも知れなかった。

それだけに売り方、つまり真杉の担当する宣伝は重要な役割をもっている。ジャーナリズムの

どんな関係にも一応のわたりはつけなくてはならないし、殊に評判の良い映画のときは一層、たてのよい映画評を書いてもらわねばならないし、不評判の作品のときは少しでも好意的な映画評を書いてもらうように仕向けなくてはならない。すべて真杉の任務の一端だ。時には夜の銀座のバーも彼の仕事場になる。初目の「うちこみ」は、それらの興業成績の最初の効果をたしかめるチャンスなのだ。前評判の悪かった映画が意外な入りだったり、好評だった芸術映画がひどい不入りだったりして、この六年間の「うちこみ」の朝の哀歓が今更のように想いだされてくるのである。

「なんだい、ダメなのか。お前が来ればパーティは一応そろうのに残念だなあ。お前のシェンクが壁で首を吊って夜泣きしているぞ。クリスマスを東京で暮そうなんて娑婆気をだしやがって、お前も最底になったなあ」

そのとき、カウンターで電話をかけているらしい客の若やいだ声を背に聴いて真杉は、ふうつと視線を声の方に向けた。以前よく口にして、耳にしたことのある「シェンク」という言葉に衝かれた感じだった。カウンターで電話をかけているのは、二十歳前後であろう、セーム皮のジャンパーを着て紺のトレンカーパンツをはいた背の高い若者である。真杉は、しぜんに彼の足もとに眼をやった。この場所には不似合な登山靴がしっかり若者の両足をつつんでいる。山へ行くんだな、彼は直感的に思った。

「いいんだ無理しなくても。だが三月の釵には必ずゆけよ、今回だけはメツチュンに免じて許してやろう」

皮ジャンパーの若者は擲^や擲^やするような口調で言つて電話を切つた。それからボックスに坐つてゐる一人の仲間を促すとたちあがつた。二人の若者は中型のきつちりとつまつたルックザックを背負うと、片手にピッケルを握りしめ重い靴音をのこしてフルツパーラーの外へ出て行つた。

あの装備だときつと富士山だろう、真杉は漠然と想像し、若者たちの姿が重い靴音とともに階段の下に消えてゆくまで、じいっと身じろぎもしなかつた。やがて、真杉はふと内心にほのぼのとした感慨がこみあげてくる。昔はよくクリスマス前に山へ行つた、そのとき定つて不参加の奴がいる。そいつは必ず恋人ができてクリスマスのために山へ行けないのだ、きつとあの電話の相手も去年の暮までは恋人がいなかつたのが、今年は恋人ができたために参加できなかったのだらう。山へ行つたあの二人の若者は、一人の仲間が恋人のために山へ行けないことを幾分かの羨望と、幾分の哀憐の氣分でながめているだらう。恋人をもつことも愉しく美しいことだ。しかし山へ行くこともそれに劣らず愉しく美しいものなのだ。山に憧れ、若く美しい恋人を慕つた頃……。彼は呆とした眼ざしを窓の外に向けた。この四月に新築したばかりの窓ひとつないテアトル・ニッポンの高層なビルの白い側壁が、ミルク色の鈍い光沢をはなつて、まるで一枚の水の壁のように見えた。その遙かな高みには朝焼けの既に消えた蒼味のうすい黄ばんだ冬の空が、深い谷間

からでも仰ぐように菱形にひろがっている。《山への誘い》——ふうっと真杉はそんな言葉を胸にかべてみた。

あの頃は、よく山へ登った。登山に憑かれたといった感じだった。もう山へ行かなくなって六年になる。大学を卒業してからも彼は二年ほど研究室に残り、どこといって別段就職もさがさなかった。いくつか適当な勤め口はないでもなかったけれども、さして気がすまなかった。それというのはホワイトカラーのサラリーマンになるのが憂鬱だったし、登り残している山が多すぎると考えたからである。いったん社会へ出たら山へは行けない、そういう先輩の言葉をいくどか聴くたびに、例え半年でも一と月でも真杉は山へ行ける気儘な時間をのばしたかった。戦争中の暗い一時期の自分の無惨な青春を想うと、その感慨は一層つよまるのである。併し、書架に囲まれしつぱりと湿気をふくんだ薄暗い研究室生活も二年つづくときさすがに或る種の焦躁感にかられる。つまり社会人としての自分にしだいに自信を喪いはじめ、《山》という魅力にことかりて社会の競争場裡へ何故か眼をそむけるような自分が卑怯にすら思えてくるのだ。そして或る恋愛の破局がその気分に一層の拍車をかけた。だから主任教授の紹介で発足後間もない興洋商事の就職がきまると、真杉は恬然として山に挑むかのように自分の仕事に寧日ない日をおくるようになった。それから六年になる——。

「真杉さん。凄い入りですよ」

そのときパーラーのドアを押して勢いよく営業部の永山が入ってきた。彼はテアトル・ニッポンの「うちこみ」の朝は、真杉がいつもこの二階の窓から眺めていることを知っているのだ。彼は背の低い小肥りの軀をボックスにしずめると、汗ばんで光っている額にせわしくハンカチを当てた。

ようやく入口をあけはじめたらしい。黒っぽい人の列は巨きな爬蟲類のように、ゆっくりと動きはじめた。真杉は窓の下の光景を黙ってみつめていた。

「真杉さん、暮と正月は、この分だと寝てくらせますなあ」永山は、いくらか興奮気味に言った。「この二、三日のうちこみ、どこの小屋もよくないですよ。こんな当りは小社こしゃだけだそうです。これから本社の方へ報告に戻りますから」

永山はコップの水を一杯のむと注文したコーヒーに口もつけずに匆々と出て行った。真杉は、腕時計を覗いた。やがて十一時である。彼はもう一度、窓の外を仰いだ。さっきまで凍った氷の壁のようにみえたテアトル・ニッポンの上部の壁面には昼ちかい陽ざしが明るく当りはじめた。先刻このパーラーから出て行った二人の若者の姿がいかに健康で逞しく想いだされた。自宅の押入にはシモンのビッケルが空しく錆びついて横たわっているだろう。真杉はそんなふうな思いにふける自分に、いつもの自分ではない自分を察知していた。その感慨は何であるのか？ 既に

分っている筈なのに実際にはもどかしいように分らなかった。すくなくともそれは今朝のテートル・ニッポンの「うちこみ」の成功とは全く疎遠で異質な、この六年のあいだの社会人としての、興洋商事社員としての意識とは別の次元のもの、のようである。とも角、それはこの自分のなかにある空虚感とも倦怠感ともつかない重い意識を吹き払ってくれる筈のもののようだ。それが背後で聴いた電話の若者の会話であり、《シェンク》という固有名詞であり、さらに、あの重い靴音のこして消えて行った一連の意識の合成から生れているらしい。彼は莫とした或る思念に憑かれていた。一体、この自分がつかまえてかかっているものを何と形容してよいのか分らなかった。かつての日、穂高の雪の山稜でみた黝く逞しく荒涼とした露岩の微動もしないたたずまいともみえるし、山小屋の暗いランプの下で樺火に手をかざしながら合唱した雪山讃歌の若き日の感傷とも思えるのである。

フルーツパーラーを出ると真杉は冬の陽ざしの薄くたゆとう白い舗道を帝国ホテルの増築工事場に沿って曲り、日比谷公園の方角に足を向けた。目的の用事はない。なぜとはなしに両蹠をしっかりと地上に踏みつけながら歩いてみたかったのだ。一種衝動に似た欲求である。彼は胸を張り、跂を精一杯のばして歩いてみた。それからしばらくしてから、ふうっと思いついたように彼はゆっくりと全身を左右に心もちゆすり、両跂をゆっくりと踏んまえた低い重心で歩きはじめ

た。アルプスに入る日、十数貫のルックザックを背負い、手にピッケルを握りしめて歩一歩山に近づいてゆく、あのリズムカルな歩調である。あたかも真杉は背に重いルックザックを負い、手にピッケルを握りしめたように、ゆっくりと幾分背をかがめて歩んでいた。そうすることによって、ほのぼのとした感慨が彼の全身に甦えり、ある莊重な生への意識を想起するのだった。日比谷公園に入っても彼はいぜんとして緩慢な歩調で足をうごかしている。しかし、その一步一步は高燥なアルプスでの日々に踏んまえた岩場や雪溪でのかつての記憶をまさぐるかのように、冬枯れの枝ばかりの樹々の下道をどここといってあてもなく真直ぐに歩んでいた。

「おい真杉！」

そのとき唐突に背後から誰か彼を呼びとめた。低い声であつたが、彼の名前をひどく懐しげに言つた。人影のまばらな師走の日比谷公園では声の主をさがす手間もなかつた。真杉は声のした背後を振りむくと薄汚い黒いジャンパーを着た大男がうっそりと五米位の距離のところ立っている。五尺八寸はあろう、肩巾の広い逞しい男である。一瞬、それが誰であるのか彼には見當がつかなかつた。冬の陽ざしを背後にうけて底のついた旧式のスキー帽をまぶかくかぶつたその男の風態にとまどつてしまった。この寒空にオーパーも着ず、総体的にあまり豊かな様子ではない。顔は黒く日灼けしてどこか山国から上京した人のようでもある。いぶかるように歩み寄りながら真杉がスキー帽の下顔を覗いた。

「おれだよ。勝呂だ、分ったか、勝呂だよ」

そのジャンパー姿の男は、二度自分の名前を言い太い指先を自分の黒い顔に向けて笑った。小さな眼孔、太い眉、これに厚い唇がいかにも大らかに笑顔ををつくっている。

「やあ大人たいじんかあ、久し振り」と言って真杉は男に駆け寄った。そしていくらか興奮したようにお互いいくども握手をした。

「いや初めはまさか真杉とは気がつかなかったんだ」勝呂と呼ばれる男はひどく感激しているらしい口調で言った。「遠くから歩いてゆく姿をみて、その歩き方が妙に印象的なんだなあ。つまり山男の歩調なんだ。それも相当山を歩いたらしい感じの。おれは無意識にその男の顔が見たくなって後をつけてきたんだが、全く奇遇だったよ」

「全くこの忙しい師走にこんな悠長な歩き方で歩いている奴もないだろう」

真杉も勝呂順造と会うのは久し振りのことである。興洋商事に勤めてからも部のO・Bの会合で二、三度顔を合せたことがあったが、以後四、五年というものは僅かな噂以外は殆ど消息を知らなかった。真杉自身、山から身を引くと同時に、それに類する会合や仲間を故意に敬遠していたためもある。大学では彼の方が実際は二、三年先輩の筈であったが、復員が遅れたのと、復学しても余り教室には出席せず、もっぱら部屋や、山ばかり登っていたので卒業は確か真杉より一年遅かったようだ。しかし山はよく歩いていた。積雪期の縦走はことに彼の得意とするところで、